

都市の学藝と在村の学藝

都市の学を考える場合、その創造的営為を探求することはもちろん重要である。だがその営為が個人的な趣味でない限り、その受容と展開をみることは、それが文化として成り立ちえている場合、不可欠の要素をなすと思われる。

大阪の学芸をみようとすると、その点はどうのように考えられるだろうか。一般にそこではつねに「町人」という語が冠せられて語られてきた。懷徳堂しかり混沌社しかり。もちろんその面を否定することはできない。しかし町人として学問することはどういうことであつたのかについてはあまり語られない。さらにまた「町人」が本当に質的に主要な受容者であつたのか、その受容や学びはどのようなものであつたのかについても実のところ、それほど明らかで

あるとはいえないようである。

ところでそういうことに関連して気になっている記述がある。それは近代の二人の学者のもつていた、大阪の学芸とくに懷徳堂へのある意識的なつながり、あるいはわだかまりである。農村と大都市という出身の違いを前提に過去の懷徳堂への意識のしかたにおいて興味深い相違がみられることである。その二人とは民俗学の柳田国男と折口信夫である。

柳田国男は播州神崎郡田原村辻川の医者兼漢学者の家の六男として生れたが、その少年期のころの思い出を語った『故郷七十年』その他の中で、彼が一年ばかり預けられた村の大庄屋三木家のことをしばしば語っている。「北条に

山中浩之

ゐたころ一時私は父の友人である三木といふ辻川の旧家に預けられたことがある。(中略) 同家の先代で拙二氏の祖父に当る慎三郎といふ人は、農家に似合わず学問好きな人であつたらしく三十数歳で早世したが、大阪の中井竹山の系統を引く学者であつたから、同家の裏手にいまでも残っている土蔵風の建物の二階八畳には多くの蔵書があつた。そして階下が隠居部屋で二階には誰も入れないことになつていったのだが、私は子供のころだから自由に蔵書のある所へ出入りして本を読むことができた(中略) いろいろな種類を含む蔵書で和漢の書籍の間には草双紙類もあつて読み放題に読んだのだが、私の雑学風の基礎はこの一年ばかりの間で形造られたように思ふ」(『故郷七十年』「幼時の読書」)。

柳田にとつて、懷徳堂最盛期の学主中井竹山に就学した三木公造の残した膨大な文庫が読書の基礎を培つたというのである。当時柳田は「虚弱で、いたづらで、また小生意気な十二歳の少年」であつた。それがどうして預かつてもらうことができたのか。

「それがたつた一度の頼みで、この厄介者をひきうけてもらったことは、いま考えても不審なやうであるが、これは多分学問への大きな愛情と、ときには主人の判断を重視した、前々からの家風であつたらう。さう思つていつまでも私は三木家の先代の人柄を懐かしがつてゐるのである。」

(同「大庄屋の家に」)

柳田はこのように、播州地域へ浸透した懷徳堂で学んだ庄屋学者三木公造へのはるかな思慕をもつていた。そこに感じられるのは、学問に寄せる素朴な信頼の念であるといつてよいだろう。懷徳堂は、農村の知識層に、「学問の大きな愛情」を育む教育施設としてみなされるようなものであつたということもできよう。むしろ農村においてであつたからこそ、かえつて純で素朴な学問への憧れが培われたとさえみえる。そのような伝統はまた柳田の中にも生きていた。

ところで、同じく懷徳堂に意識的なつながりを持ちながら、折口信夫は、柳田とは全く異なつた感慨を語る。彼は大阪市浪速区木津の生れである。折口は大阪という町人の町に生れて、学問に志すことが、どのような屈折したあり方においてなされるかを、過去の懷徳堂に関わらせて語っている。

「懷徳堂の歴史を読んで、思わずため息をついた事がある。百年も前の大阪町人、その二三男の秀才・学才ある者となり行きを考えさせられたものである。秋成はかう言う、境にはぬ教養を受けたて、あいの末路を、はりつけものだと罵つた。そんなあくたいをついた人自身、やはり何とつかぬ、迷い犬の様な生涯を了へたではないか。でも、さ

ういふ道を見つけることがあつたら、まだよい。恐らくは、何だか、其暮し方の物足らなさに、無聊な一生を、過すことであつたらうに。養子にやられては戻され、嫁を持たされては、そのあはぬ家庭に飽く。こんな事はかりくり返して老い衰へ、兄のか、りうどになって、日を送る事だらう。部屋住みのままに白髪になって、かひ性なしのをっさんと家のをひ、めひには誘られることであつたらう。」

〔『古代研究』「追ひ書き」〕

折口にとつては「これは、空想ではなかつた」。彼の曾祖母の継子にこのような成り行きをもつた「彦次郎」という人がいたのである。家業がいやで学問を嗜み、家に居れば屋根裏部屋に籠り切りで、継母の目をさけて、二階から降りて来ず、その間の所在なさに読書や書に愛いをはらつた。果ては久離きられた身となって熊野へ落ち行き、そこで寺子屋師匠としてわびしい月日を送つてやがて死んでいったという。

主著『古代研究』を成稿し、学者として立とうとしていた折口は、自分にも「まだ古い町人の血がよどんでいる」といい、この家の者語りが「強く意味を持つて響いて来る」。『かうした、ほうとした一生を暮らした人も、一時代前までは多かつたのである。』という。

過去に大阪町人の子弟として懐徳堂に学んだ人たちのあ

り様が、折口にはこうしたものとして感じられていた。折口には「彦次郎さんらのため息」がまるで自分のため息であるかのように聞えたのである。ここにあるのは、柳田においてみられたような学問への素朴な信頼や愛情ではない。むしろ町人社会で学問することの困難さが語られている。

この二人の学問に寄せる意識の相違は、たしかに二人の民俗学につながるような個性の違いであらうが、それだけではなく、両者とも地域に根ざした深い実感として語っているように思われる。そうとすれば、大阪の学を町人の学と一般的にみなし、好学的な都市町人という枠内、事柄と考えようとするのは、表面的にすぎようである。「かひ性なしのをっさん」の相なつた都市の学芸、「かひ性」ある在村有力層の相なつた在村の学芸、その関係の中に「大阪の学」の形成と展開があるのではないだろうか。

〔大阪女子大学教授〕

※本論文は、二〇〇一年度日本思想史学会大会発表要旨に収められた文章を転載したものであり、校正については編集委員があつた。